

〈女と男〉のミニ雑誌〈あごらミニ〉 ●何でも言える

●何でも書ける●小さな〈ひろば〉=AGORA・〈あごら〉

●あなたの声を待ってます。みんなでつくる〈あごら〉

あごら

MINI

〈30号〉

1979年 7月10日発行 ¥100 丁25

今月のなかみ

〈あごら東京事務局編集〉

表紙のことば	「家庭の日」つてなあに？	河野貴代美	1
あごら20号記念講演の集いから	宮口 純子	2	2
呼びかけ	横川 澄子	2	2
あごら全国大会にどうぞ・女性心理研究会を作りませんか	3	3	3
ムラづくりキャンプにどうぞ	6	6	6
一・二〇集会とその後の私たち	5	5	5
大野千恵子さんへ	6	6	6
梶谷典子さんへ	6	6	6
梶谷典子さんへ	6	6	6
ますのきよし	6	6	6
ナバール寸描	7	7	7
各地のもよし	8	8	8
女のついで・女の講座	8	8	8
斉藤 千代	8	8	8

「家庭の日」つてなあに？

河野 貴代美

「家庭の日」を設けることを自民党が構想している
と新聞報道があった。その理由と内容の詳細はまだ
明らかにされていない。
「家庭の日」としてイメージされるものは、まずふ
だん下宿人といった格好の父親が家庭奉仕をしてい
る姿である。台所に立ったり掃除をしたり。次には
一家をあげての行楽。いずれにしてもなんだか冴え
ない。父親が何かしてくれたとしても、イヤイヤ、
シブシブ、チグハグ……。一家あげての行楽にして
も、その様子は、連休などにみられるシーンと五十
歩百歩。今日は「家庭の日」だから、お父さんやお
母さんとゆっくり話し合おうなどと唐突に言っても
子どもはキョトンとするだけだろう。どうも楽しい
ムードがわいてこない。
大平首相は、国会で「女性はお嫁に行くのが最大
の幸せ」と言った人であり、自民党総裁選挙の際、
「家庭基盤の充実」を公約にしていた。この公約が
「家庭の日」設置などともつながってゐるのである
う。しかし、この家庭の基盤なるものが、いま一つ
はつきりしない。第一、現代の私たちにとって、家
庭とは何なのか。家庭に何を期待し、家庭はその成

員にどのような義務を求めるのか。そこから何が生
まれてくるのか、よくわからない。アメリカなどは
は、いわゆる伝統的な家庭という枠外の存在様式が
若い世代のあいだでふえている。同棲、未婚の母、
独身も。
しかし、質的变化を問うことはない頑強な日本の
「家庭」の中味は、さまざまな問題が後をたたない。
テレビドラマの「夫婦」ではないが、三十余年も一
緒に暮らしてきて、妻は夫が何を考えているのかわ
からないと言う。突然、妻に母子心中をされて、夫
はあわてる。子どもは、親などは自分に一番遠い存
在だと感じていて、おまけに嫁姑の問題は絶えない。
また見方を変えれば、今さら「家庭の日」などを言
うまでもなく、世はあげて「マイホーム主義」で自
分さえよければ他人は知らぬ存ぜぬの利己的シラケ
ムードが満ちている。
こんな根本的問題を放置したまま、なぜいま「家庭
の日」なのか。国民の目を家庭にむけて、何を陰べ
いしようとしているのか。まさか女性に「仕事をや
めて家事育児、老人の介助に専念しなさい」と言っ
ているのではないでしょうね、大平さん。

M・ヘック
B・ウェルグムスチル 共著 柳沢由実子訳
スウェーデン

女性解放 の手引

価二〇〇円(送料一六〇円)

女が自由で平等な国は世界中に一つも
ないと言つてもいい。それでも、そこに
住む女たちは、差別に耐え、嘲笑に耐え、
抑圧に耐えている。著者たちは、このよ
うな現実を見事に分析してみせる。そし
てこの現実を変えるために、どのような
一歩を踏み出したらいいか、というヒン
トを与えてくれる。(訳者あとがきより)
E・E・マツコビイ編
青木やよひ・河野貴代美
池上千寿子・深尾 凱子・山口良枝訳

性差(その起源 と役割)

価一八〇〇円(送料一六〇円)

女児と男児は同じに育てれば全く差が
ないのか、あるいは「男らしさ・女らし
さ」は時代や文化によってどの程度違
うものなのか、といった疑問に答えてく
れる。本書は、女性問題に関心のある人
たちに理論的根拠を提供するものである。
(訳者、青木やよひ「はじめに」より)

狼にそだてられた子

A・ゲゼル著/800円

戦後信州女性史

辻村輝雄著/2800円

○お近くの書店にご注文下さるか、定価
に送料を加え、書留または郵便振替で
直接小社へご注文下さい。
112 東京都文京区目白台3-21-4

家政教育社

電話 九四五六一・二六五
振替東京七・七三三八二



あごら20号記念 講演と映画のつどい

水田珠枝さんの講演と 時枝俊江さんの映画に集う

レポーター

宮口純子

『あごら』二〇号記念、講演と映画の会が、六月二十三日、新宿文化センターで開かれた。

駅からかなりの距離に加えて、大変な暑さ。それでも、それぞれ期待に胸をふくらませて人が集まってくる。会場である定員二百余名の小ホールは八分の入り。

まず、斎藤千代さんの挨拶のあと、時枝俊江さん監督の記録映画が二つ。町の政治——勉強するお母さん——は白黒の短編。これは国立市がまだ国立町だった頃、町の子算を勉強する主婦たちの活動をえがいたものだ。夏の暑さにもめげず夜公民館に集まって、町の子算項目を一つ一つ調べていく。表を作ったり、結果を発表しあったり。例えば教育費は、本当に子どもたちの為に使われているのか、学校を回って説明を受ける。また踏切りを渡らなければ学校に行けない子どもたちのためにお金を集めて一校を建てる。ついには仲間の一人が町会議員になり、さらに主婦たちの声を政治に反映させるようになっていく。それぞれがやる気になって力を合わせればこんないろいろなことができるのだと頼もしく感じた。

子どもの創造性に驚く

もう一つのカラー「子どもを見る目」では区立の幼稚園の五歳の男の子数人のグループが遊びを發展させていく中で、創造力を磨いていく様を描く。いつもリーダー中心に遊んでいたグループが、保育者の手助けで、グループリーダーなしに自主性をいかに発揮していくかがみものだ。大きな段ボールを与えられた子ども

たちは、エレベータを作ることにする。ある子は窓を切りぬき、ある子はスイッチを作る。保育者の手助けでひもをつけて壁に取りつける。大きな木箱で作られた基地の上にお弁当がエレベータで運び上げられる。一大事を成し遂げた子どもたちの満足そうな顔。

子どもたちの想像力・創造力の豊かさには目をみはるばかりだ。木箱の基地を陸にし、床を海とみて、魚に変身。しゅうゆのあきびんを二つ背にくっつけ、とうふのバックの底を切り青いセロハンをはった水中目がねのアクアラングで、海をスイスイ。

字を教える幼稚園は多いが、子どもの創造的な遊びを指導しているところは少ない。幼稚園児を持つ母親としてはうらやましい限りであった。

またカメラも移動せず、一つのところにじつと腰をすえて、子どもたちを追っていて、その意味では変化のないフィルムであるはずなのに、見ていてあきることがなかった。

男女ともに意識改革を

休憩の後、水田珠枝さんの講演に入る。「これからの女性解放運動」がテーマ。水田さんは、二〇号でも、今回でも、難しいテーマをもらって、いつもへあごらの編集部には、しばらくっているとジョークをとばす。

水田さんは、戦後の政治の流れの中で現在の女性解放運動は、画期的なもので、歴史始まって以来の試みなのではないか。私たちは、まず男性の、そして女性自身



お母さんたち
おはなし聞いているんだよ...

の意識改革をやらなければいけない、と熱っぽく訴える。差別されていること、不当な立場に置かれていることを、しっかりと感じとらなければならぬ。女たちが手を結ぼうと集まっても、主婦、職業婦人、ボランティア、市民活動参加者など立場の違いによって主婦もバラバラで連帯が難しい、それは男性の都合のよいように女の生活がバラバラにされているからである、と。現在の状況は悪く、見通しは暗い、という指摘が参加者に共感を伝える。しかし、だからといって、慢然とはしていられないので、これから一九八〇年代にかけては、何をしたいか、いいのか、水田さんは、次のような提案をする。一つは、労基法研究会報告の検討、もう一つは、地域の民主主義の運動、現在、とられている家庭基盤充実政策への抵抗。「女よ家庭に帰れ」というムードの中で、福祉予算をへらし、女に老人介護などの肩代わりをさせ、家庭の暖かさを強調しているが、これらは、ファシズムへ傾斜することの危険を含んでいる、こういう中で民主主義社会の一員としての個を自覚し、意欲的な人を作ることが解放運動の重要なポイントではな

質疑応答

いか、と結ばれた。

質疑応答には、会に参加された時枝さんもおはいいりになった。

まず、水田さんには、どういうきっかけで女性解放運動に参加されるようになったか、という質問がでた。水田さんは、大学をでて、学者としての一步をふみだした時、女性差別を感じそれがきっかけだ、と。これから失業者が増える傾向の中で、家庭の主婦でも絶対的に経済的自立をはたさなければならぬだろう、という疑問とも質問ともとれる発言があった。水田さんは原則的にはそう考えている、とおっしゃったが、このへんは、参会者も含めてもう少し深く討論できればおもしろいだろうと感じられた。

時枝さんには、幼稚園の子どもたちがなぜ男の子ばかりなのか、という質問がだされた。時枝さんは、どこに行ってもそれを聞かれる、と苦笑される。女の子の遊びは、ままごとが逃避の場になっていたりして、どうしてもおもしろくない。なぜそうなのかを考えていくことがこれからの課題だ、とおっしゃった。



個人の意識改革が必要です。
と水田さん

省エネルギーで冷房をおさえた会場は暑かったが、実り多い四時間だった。

下から盛り上がり、手をたずさえてゆく運動を、に感銘

横川 澄子

「夫もどうにか洗たくと食事の後の食器洗いを受けてくれるようになりました」と述べる水田珠枝さんの言葉に、おもわずほほえみうなずかれました。社会的な立場は大きく違っていますが、生活面で自立しない夫を持つ女として日々奮闘されているのだと思うと、同性として、身近な存在として共感をおぼえました。同時に家事育児は女だけが受け持つものではなく、人間として生きていく上で男女共に分かち合わなければならない基本的なことなのだという思いを強くしました。専業主婦から脱けださない限り、共に分かち合う生き方は求められるものではなく、求めても得られないのだと思います。

「今のウーマンリブなどに代表される女性解放運動は、過去の運動とは違って個人の意識の変革を核としている。だから私たち一人一人が隣人に訴え、輪を広げていかなければならない」とこの水田さんの言葉にもうなずかれました。過去の婦人参政権運動、廃娼運動に代表される婦人運動は、ほんの一部の目覚めた女性の運動であり、下から盛り上がったものではなかったと思うのです。このために婦人の参政権も今になって、その権利の重さを自覚できない弊害を嘆く結果にな

っています。現在、名もない地域住民である私自身、意識変革を己に課し、夫に課し、それを地域の人たちにも広げていきたいと思っています。まだ少数派だとしても、平凡に生きている女の中からでできた、まさに下からのリブなのだ、と納得できるのです。この個々の意識変革が、男中心社会ゆえに生じる女同士の対立や足のひっぱり合いをなくし、組織や社会に対する責任を自覚させ、意識を持った人間としての姿勢を形作るということも水田さんは述べていました。まさにそのとおりだと思います。もう私たちは、先が少々安定しているから、他人がするからといったようになくならぬ理由で自分の生き方を選んだり、またそのような価値基準を子どもにおしつたりするのをやめようではありませんか。ロッキード・グラマンに代表されるエリートサラリーマン、利益本位で患者を薬づけにする脱税ナンパワンの医者、なぜこのような職業を青春を犠牲にしてまで選べる必要があるのでしょうか。

水田さんはこれからの女性解放運動の方向として、三つのものをあげられました。特に三番目の「女性よ家庭に帰るな」には啓蒙されました。私も声を大にして言いたい、絶対に家庭に帰りたくない、と。家庭だけの生活は決して人間を育てない。外の生活があつてはじめて、家庭の生活も生きるのだ、と。

（あごろ）の集いによって間接的ではあるけれども、水田珠枝、時枝俊江のお二人との出会いを持てたことをほんとうにうれしく思います。

第2回あごろ全国大会

七月二十一日（土）

愛知県労働研修センター（足光寺）

〈出会いの場〉〈分科会〉

七月二十二日（日）

名古屋市婦人教育会館

〈分科会報告〉

〈講演と討論〉

主婦のあつ方を同う、松井やよりさんを囲んで

東海地方でのあごろ集会。あごろ東海へのメンバーも張り切っています。申し込まれたが、キャンセルになりね!!名古屋で会いましょう!!

詳細はあごろ東海へ!!

「女性の心理」に

興味のある方、女だけのグループを作って勉強を始めませんか？本屋にいけば男の書いた精神医学書ばかり。精神科医も男性が殆ど。世の中で「女の心理」は男の文化・価値観を通して体系付けられています。こんな点に疑問をお持ちの方で、すでに精神衛生部門に関わっている方、ご連絡下さい。

毎月一回 七月から

連絡先 大八木美枝

TEL 九九九四〇三二

（月・火・土・日の午前中）

一・二〇集会と、その後の私たち 私たちの男女雇用平等法をつくる会

石原啓子

「雇用平等法の実現めざして大集会」。
「八百人、熱気の合唱」。「差別を訴える五
人のアピール」——一月二十日の「労基
法改悪に反対し、私たちの男女雇用平等
法をつくる大集会」のようを、各紙は
一せいにこのような大見出しをもって伝
えました。

働く女たちがついに怒りの声を上げた。
理念ばかりの「男女平等」にもうごまか
されなくなった。平等の具体的実現を要
求しはじめた。それは確かに特筆するべ
きことであり、測り知れないほどの大き
な意味を持つものであると、私たちは思
っています。

この日の集会で、日産の男女差別定年
制を告発して中本ミヨさんは、次のよう
に言いました。「働かなくては生きては
いけない。五十歳で退めろと言うことは、
五十歳で死ぬと言うことです」。

「働く権利は生きる権利である」この自
明のことがらが、こと女に關しては不問
とされてきた。私たちはそこに、「男は
仕事、女は家庭」という社会通念（性に
よる役割分業意識）が果たしてきた、そ
の犯罪の役割をかいま見る思いがします。
それは女に「家庭」という足かせをはめ
ることによって、企業の差別雇用を正当

化し、思いのままの搾取と使い捨てを許
してきました。「永久就職すればいいじ
やないか」「養ってもらえばいいじやな
いか」このような意識こそが、職場での
差別を隠ぺいし、女を半人前の労働力と
し、そして女の個人としての尊厳と自立
を侵し続けてきたものなのです。

もちろん差別雇用は、民間企業にだけ
あるものではありません。公的機関におい
ても、平等は、たてまえ以上には存在せ
ず、そして働く女の権利を守るべき労働
組合自体が、性差別に關する問題を、た
いていの場合、スローガン以上には持ち
得なかったことも、残念ながら事実なの
です。

あなたには覚えがあるはずですよ。

働いているときに、また、働こうとし
た時に、あなたがかみしめなければなら
なかったあの失望と、屈辱と、そしてや
りばのない怒りを。

「私たちの男女雇用平等法をつくる会」
の原点は、まさに、不当な性差別に対す
る私たち女のこの深い怒りにあるといえ
ます。

あらゆる差別の徹底を

私たちのこの会の目的は、狭義にいえ
ば、募集・採用段階から定年退職に至る
までの、雇用に關するすべての性差別を
禁止する「男女雇用平等法」の制定と、
それに基づいて、実際に差別から女たちを
救済するための機関である、「男女平等
委員会」の設置を実現させることです。

けれども私たちは、法律をつくれば性
差別がなくなるとか、法律が性差別をな
くすための最高手段であるなどは考え
てはいません。大切なことは、私たち女
自身の主体的な運動であり、とりわけ働
く女の現場での運動です。そして、法律
や制度は、性差別を変えるこのような運
動に、一つの手がかりを与えるものです
。したがって私たちの会の目的は、単な
る平等法制定ではなく、働こうにも働け
ない、開おうにも聞えないといった現在
の状況を、女の労働権を法的に確立する
ことによって、突破しようとするものな
のです。

男女雇用平等法は

なぜ必要か

現在、私たちの会には約二百名の会員
がいます。その一人一人がおかれた状況
は、職種ひとつをとってみても、様々で
す。私たちは、私たちの運動を広範囲に
推し進めるためにも、まず平等法に關わ
る基本的な問題についての、自由でつづ
こんだ話し合いが必要だと考えました。
五月中旬から五回にわたって企画された
公開の連続討論会は、そのためのもの
です。

現在第三回までの討論会が終わりまし

た。まず第一回目は五月十二日「男女雇
用平等法はなぜ必要か」というテーマで
おこなわれました。ここでは、(1)雇用
における女性差別の現状——退職定年差別
や、単純な賃金差別は是正されつつある
が、仕事差別・身分差別などの新たな形
での差別が拡大している。(2)差別の原因
には、政府・資本の女性労働力政策、そ
れを支える社会的条件と社会通念、現行
法制度の欠陥の三点が考えられる。(3)立
法措置の必要性と問題点——労働運動の
力が弱く、行政指導も形ばかりの日本
では、特に立法措置が必要である。労基法
研究会報告は、現状認識を欠き、平等法
を保護解消とだけ合わせにするという誤
りを犯している。ただ平等法にも、それ
が条件整備より先行する場合や、能力・
能率主義とからむ問題、それらの結果と
しての女性の分断という危険な面がある。
(4)どんな平等法が必要か、

以上の点についてレポートがあり、そ
の後の討論は(3)の部分にかなり集中して、
次のような意見が出されました。

「平等法ができていく過程で、過渡的
には能力主義が強まる恐れがある。これ
をどう考えるのか」「現在の社会では、能
力以前にまず機会が与えられないことが
多すぎる。平等な機会を要求することが
先決と思う」「能力といっても、何のた
めの能力かが問題だ。資本のための能力
なのか、私たちのためのものなのか、そ
れを問わずにつき進むのは危険だ」「キャ
リアウーマン志向ではなく、今の世の中
を変えて行くためにこそ、中に入って
行く人も必要だ」など。

保護と平等の関連性

第二回は「保護と平等をめぐって」、労基法研究会の報告が出た後の状況の分析と、(1)現行の保護は、母性を守るための最低条件。むしろ国際水準に合わせて引き上げるべきで、改悪は許せない。(2)母性機能は社会にとって不可欠なものであり、社会的に保障されなければならぬ。(3)男女の平等は基本的人権の問題であり、性差別は、人権侵害として許せない。(4)女だけの特別扱いがなくなるのは、労働条件が引き上げられ、社会的条件が整った時のことである。もちろん妊娠出産に関わる保障は、どのように社会が変わろうと、必要なものである。——といった事項がレポートされました。討論では、「保護があるから差別があるのではなく、保護がなくとも、女性を差別して雇用する構造は変わらない。しかし、保護が差別の口実にはされるし、現実には、現場・職種によって、一時的な、保護の「適用除外」を考えざるを得ない場合もある」その場合、女性全体への影響を考えると、全体の労働条件を向上させる努力をすることが必要である」等の意見が出されました。

男女雇用平等に

必要な条件とは何か

第三回は「男女雇用平等に必要な条件づくり」男女が平等に働くための社会的条件づくりとして、次の三つの分野にわたる運動が必要であることがまずレポ

ーターから説明されました。(1)労働条件の向上——労基法を改正させ、週四十時間労働を確立し、時間外労働や深夜業を制限すること。また、有給休暇の基準を引き上げること。(2)母性保障の確立——産前・産後休暇の延長。妊娠中および産後一定期間の母性保護制度の強化。所得と原職復帰の保障等。(3)家事・育児・介護の社会化——育児時間の延長と、男女による取得の法制化。公立の保育所の拡充と、保育内容の充実。保育労働者の労働条件の向上等。

会場からは、「児童福祉法を改正して児童の保育される権利を確立しなければならぬ。母親に養育される権利(母乳期間)と、保育所で保育される権利がある。前者のためには母親の産後休暇を、三か月は確保しなければならぬ」といった指摘があり、また、「家事の社会化をどう考えるのか」「無認可保育所をどうしていくか」といったことについて議論がかわされました。

常に活発な意見の交換

このように連続討論会では、いつも時間切れをこころはるほどの活発な意見交換があり、「つくる会」の統一認識を打ち立てるための努力が積み重ねられています。あと残りは六月三十日「男女雇用平等法を実現させるために」七月二十一日「臨時パート労働者と平等法」の討論を予定しています。

もちろん会の活動はこのほかにもいろいろあります。会報グループは「つくる

会ニュース」を毎月発行し、パンフレット編集グループは質問—回答(Q&A)方式のハンデイン「つくる会」第一号のパンフレットを現在編集集中です。そして法案グループは、「雇用平等法案」の内容と、ガイドライン、条件整備の問題の検討を進めているのです。

「働きたい」「平等に働きたい」——私たちがそう思うのはあたりまえのことです。けれどもあたりまえのことは、黙っていても特別なことになってしまいます。声を上げましょう。

手と足を動かしましょう。知恵を出し合いましょう。そして、一緒に、運動を進めて行きましょう!

ムラへりキャンプに

参加しませんか!

島根県の過疎地の一つ弥栄村で、農業を中心にした共同体運動をしています。今回、村役場や部落の自治会と協力して新しい夏期ワークキャンプを開催します。私たち若者の生き方や考え方が、ムラの発展の刺激になるかどうか、共生、先働から何が生まれるか、などを模索したい。場所 島根県那賀郡弥栄村三里

期間 一期7・20〜8・5

二期8・6〜8・20

費用 参加費五〇〇円

生活費 各期七〇〇〇円

問い合わせ先 同地キャンプ係 田中茂

TEL(五五五)八五五六(直通)

(朝七・三までと夜六・三以降)

私たちをとりまく公害

—婦人民主クラブ活動年表—

編集 婦人民主クラブ公害部
婦人民主クラブは1946年廃城の中に生れ同時に婦人民主新聞を33年間継続して刊行しています。その中から私たちの反公害運動や記事を年表としてまとめました。

300円 千140円

女の老い

編集 婦人民主クラブ

高齢化社会がやってくる。私たちがこの問題をどう受けとめるか。年金を現行の積立方式から賦課方式に切りかえさせよう。五万円を獲得しよう。男社会の中で女としての生きがいを探ることから出発した第一集です。

150円 千140円

天皇制・女

—天皇「即位」50年を問う—

編集 婦人民主クラブ

天皇訪米の意味するもの……針生 一郎
教育と天皇制……村田 栄一
わたしの内なる天皇制……もろさきよう子
天皇制差別の底辺から……宮沢志津子
あなたの中に天皇はいないか……朴 寿 南

350円 千120円

婦人民主クラブ

東京都渋谷区神宮前3-31-18
振替東京8-196455

☎(402)3244

意見 いけん

はんろん反論

大野千恵子さんへ

— やっぱり具体的な

要求を出しましょう

梶谷典子

「あごらミニ」29号で大野さんは「今は具体的要求を出すべき段階ではない」と言っているらしいんですが、そうきめつけてはいけなのではないでしょうか。ちよっと廻り道をして賃上げの場合について考えてみてください。

私たちは現在の体制の中で賃上げを要求します。今賃上げすることによって私たちの生活や労働の問題がいつべんに解決するわけではなくても、要求しただけのもがすべて獲得できるとは限らなくても、賃上げの要求は続けるのが当然だと思っています。「賃金が高くなると体制変革に向けてのエネルギーが弱まるから賃上げ要求はすべきでない」などと考える必要はないでしょう。

賃金以外の労働条件についても、具体的な改善要求を出し続けるべきだと思います。それが問題の根本的、最終的解決にはならなくても、要求したとおりの条件が実現しなくても、現状を少しでもよくしようとすることには意味がありますし、それを積み重ねて行くことが将来のために必要なのではないでしょうか。

大野さんは保母としてきびしい労働を体験していらつしやるそうですが、保母は今このような労働、このような暮らの中でこんなに疲労し、健康を害する恐れがこんなにある。だからX時間以上の労働は法律で禁止すべきだというのが「具体的要求」です。そうした要求を出すことにどんな危険が伴うのでしょうか。

「差別をなくすためには女の労働条件を男なみにするのでなく、男を女なみに保護すべきだ」という考え方はかなり広まって来ましたが、そのために「男の時間外労働を一日二時間以内に」「深夜労働は男女とも原則として禁止しよう」といえば「具体的要求」になります。このような要求はどういうふうに危険でしょうか。（革新側は労働時間を全体的に短縮する労基法改正案を出し続けているのに、それを支持する大きな運動が起らないことを悲しく思っています。そうした運動が盛り上がる状況の中では——私も盛り上げるための努力は続けますけれど——注意深く条件をつけた上で部分的に「女を男なみに」することも考えざるを得ません。

具体的な要求は当然実態をふまえたものでなければなりません。大野さんはどんなことを念頭に置いて「実態を抜きに具体的要求の詰めに入る」ということばを使っているのでしょうか。また、「意識の変革」ができていない今の婦人労働者からどんな危険な「具体的要求」が出てくると恐れているのでしょうか。

具体的な要求を出すために現状を点検

するなかで、現状への怒りを強め、変革への意識をたかめるということは考えられないでしょうか。

賃金以外の労働条件の問題は賃金の問題より複雑だとも言えます。すぐにスツキリと要求がまとまるというわけにはいかないでしょう。だからといって口を閉ざしてしまふのでなく、しっかりと議論をして要求を出していきたいと思っています。

梶谷典子さんへ

— ますのきよし

「あごらミニ」29号の梶谷さんの意見に疑問を感じたので投稿します。

梶谷さんは「男の労働時間の規制を今の女なみにすることは、近い将来にはできそうもない」から、（女の）「時間外労働、休日労働についても「適用除外」の道を開くよう労基法を改正しよう」と主張されています。

これはまさに「男並み」平等論の典型だと思っています。現在、ごくわずかな職場ながら、男も育児時間がとれる所があるし（現代子育て考VI参照）、これからなんとかそういう職場を増やしていかなければ、と思っている矢先に、梶谷さんのように、「できそうもない」と断定的に言われてしまったのでは、ガツクリです。平等をすすめるために、いろんな方法があると思いますが、方向が全く逆では困ります。

働きすぎている男に女を近づける方向ではなく、生命を産む自然性に立脚している女の側に、男を近づける方向で平等

を実現していくことこそ、資本の論理に対立して、人間の論理をつらぬく道だと思っています。

「私は生休はいらない」「私は産休は六週間で結構」という女性もいるようですが、こういう人は「オレは休日はいらない」「オレは深夜残業でも何でもやる」というモレーツな男たちと同様、働きすぎ日本を支えている張本人だ、と思います。力があり余っている人は、何も職場で精出さなくても、社会運動とか地域活動など、無償の人手を必要としている分野は沢山あるのですから、大いにそこで働いてほしいと思うし、ほく自身も賃金で拘束される時間は最少限にとどめ、自分の自由になる時間は、生活や市民活動の面に活用しているつもりです。

まあ、それは余談ですが、梶谷さんの言われるマスコミ産業の中だって、時間短縮したいと思っている男たちはいらばずです。先日、ぼくが「男の子育て」のことで、ホンの一寸、テレビに出たときも、そのディレクター氏が「ぼくも子持ちで、よく休みを取るんですが肩身が狭いですよ」とホやいてました。梶谷さんの主張のように労基法が改正されたら、こういうディレクター氏は、ますます肩身がせまくなるのではありませんか？

そういう方向で、仮に「マスコミで働く女が増えた」ところで、それが果して望ましい男女平等と言えるのでしょうか？ それは精々、男化したエリート女が、いくらか増え、男の女化がますます困難になる、という方向ではないでしょうか？

〈あごら〉の会員の城戸久江さんから、カトマンズに小さなホテルを開いたのでも、リフを作ってほしいと手紙が来た。「見ないものはつけれない」と返事を出したら、「招待します」と願ってもない誘い。急に思い立ってネパールに飛んだ。国際電話は「空中状態不良」で通じず電報は途中で蒸発。迎え人のいない空港から中世を思わせる町なみを通りぬけた時は、はるけくも来つものかなという思いがあふれたが、探しあてたキド・ゲストハウスには温かい心があった。

ネパールの民家を改造したゲストハウスは、客室十室、ホテルというよりは民宿という風情だが、素朴な建物ながら清潔と衛生には十分な心くばりが感じられた。城戸夫妻は共働きの元教員。理科教師だった城戸氏は機械に強い器用な人、たまたま訪れたネパールで無線機を修理して腕を見込まれたのが住みつく契機になったとのこと。いまは家具工場の支配人。自宅も手づくりした日曜大工の腕が、ここでは尊敬のマトになっている。働き続けてきた久江さんも専業主婦は落ちつかず、気ばらしかたがたオープンしたが、日本食サービスが人気を呼んで、在留日本人のたまり場になったとか。大学で日本語を教えている教授、商社マン、建築会社員、民俗学者、旅行業者、ネパール人と結婚した女性たち、大農場を開いた若夫婦など、短時日の間に思いがけぬ数の在留日本人にめぐりあい、ひとりひとりの人間像に感慨を抱いた。

折しもネパールは歴史始まって以来のストで湧き立っていた。議会に代わって

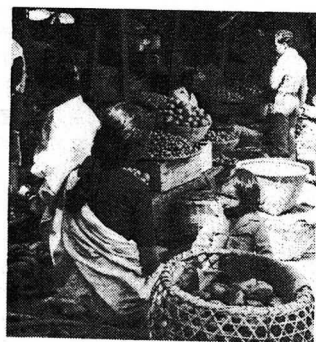
元老院制がとられて二十年、議会制復活の抗議だが、その底には、王政とそれに結託した人への不満がある。しかし九六％が農民で、おだやかなネパールの人々が、ストという非常手段をとった陰には、隣接する二大国、印度と中国をそれぞれ支援するソ連とアメリカのあと押しがあるというのが、日本人・ネパール人を問わず一致した意見だった。王政の危機を日本の新聞は一斉に伝えていたが、政党政治になって、結局はそのあと押しの二大国に牛耳られることになるのはもつと危

ネパール素描

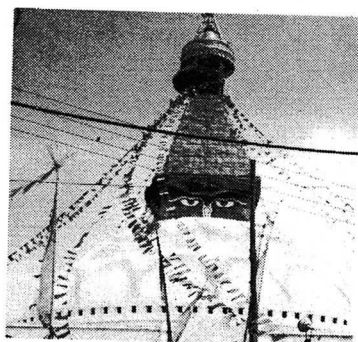
斎藤千代

険だというのが私が直接聞いた限りのネパール人の意見だった。「このままではいけないのだが」と念を押しながらも、ストの指導者といわれるコイラ元首相の大演説には一万人の人々が広場に押しかけると伝えられた。私は、もちろん駆けつけたかったが、日本大使館の外出禁止令で、措くも参加の機会を逸した。しかしスピーカーから朗々と流れ出る声は部屋まで聞こえて来、政治が広場（あごら）から始まる外国の伝統に、また一つ感銘を受けた。

日の出と共に働き始め、夕日と共に作物を負って家路に向かう女たち



バザール(市場)の母と子



世界の正義を見守る目玉寺

カトマンズの印象は、一言で言えば七五年に行ったメキシコやペルーによく似ている。しかし、インカやマヤの建造物が遺跡であり、廃虚であったのに、ここでは四、五世紀からの民家や寺院がそのままに残り、人々が今もその中で暮らしている。歴史を千年も千五百年もあと戻りしたような不思議さが衝撃的だった。目玉寺として知られるスワヤンブ・ナート、幼い少女が活き神として暮らしているクマリー寺院など、二千年も前の建物がある。カトマンズの中心にある。辻々には広場があり、農民が朝夕の涼しい時間に作物を広げ、人々が群れ集う。はたはたと背を叩かれて振り返ると、糞にまみれた牛の尻尾だ。あそこにもここにも、牛が悠々と歩き、人間と動物と自然が見事に調和している、時折り通りぬける車も、牛や人間に遠慮してゆったりと進む。「明日といえは来週、明後日といえは来月のこと、という慣習に最初は驚いたけど、ここは五十すぎの人間にはびつたりのテンポ。年を重ねた人は年相応に尊敬され、家族や隣人が支え合い、孤老の死などということは決してない」と、城戸さんはしみじみと語っていたが、日本が西欧文明から学んだものは何だったのだろうと、改めて深く深く考えずにはいられなかった。私たちの目からは貧しく見えようとも、おだやかで安心しきった人々の表情。路上を駆け回る子どもたち。物質にとらわれてしまった日本人のことが、鏡に映すように見えてくる。女の運動は、男に追いつき追い越せでは決してあつてはならない。ほんとうの人間らしさを求めたいと、嘆息しつつ思った。

日	時	テ	マ	会	場
7月8日(日)	13:30～16:30	あごら埼玉第一回呼びかけミーティング		佐藤藤子宅	0488-64-5916
12日(木)	18:30～	あごら21号編集会議〈あごら編集委員会〉(参加自由)		あごら読書室	03-354-3941
	18:30～	刑法改悪に反対する婦人会議・集まり(毎週木曜日)		事務局	03-357-9565
13日(金)	10:00～	鉄連の仕事差別・賃金差別裁判		東京地方裁判所	
	19:00～	小西あやのでんぐりがえ史〈JORA〉		すべーすJORA	03-203-6022
	18:00～21:00	結婚の意味を問う継続討論〈藤村 哲〉		豊島区民センター	
14日(土)	18:00～21:00	映画と講演のタベ「高く跳べ ぼくらの先生」講演 斉藤ディレクター		豊島区立南大塚ホール	03-946-4311
	18:00～	小川選手 参加券500円 連絡先03(985)3308〈わたしのなかのわたしたち〉			
		公開質問状グループ集会〈国際婦人年をきっかけとして行動する会〉		事務局	
15日(日)	13:30～16:00	『結婚と女・我』漆田和代論文をめぐって』報告 平田ひと江 〈あごら京都・例会〉		シャンバラ	075-821-3579
	13:00～16:30	第16回「市民活動サービス・コーナー」利用者交流集会		立川社会教育会館第一会議室	
	19:00～	冒険少女クラブ「女にとって冒険は何か考えてみよう」		すべーすJORA	
18日(水)	18:30～	労働分科会・労働相談〈行動する女たちの会〉(毎週水曜日)		事務局	
	18:30～21:00	アジアの女たちの会 79年度第7期女大生「国籍法・入管体制のカベ」		渋谷勤労福祉会館	03-462-2511
		田中 宏氏ほかパネルディスカッション 会費300円			
19日(木)	18:30～	鉄連の7人とともに性による仕事差別・賃金差別と闘う会 学習会(毎第3木曜日)		未定	
20日(金)	13:30～	第12回家族社会学セミナー「家族と性役割——性差別をめぐって」——22日(日)まで3日間		国立婦人教育会館	0493-62-6711
21日(土)	13:30～17:00	『私たちの男女雇用平等法をつくる会』継続討論集会No.5「臨時・パート労働者と雇用平等法」		東京都勤労福祉会館	
	19:00～22:30	女のパーティー 〈まいにち大工〉		すべーすJORA	
	14:00～	第2回あごら全国大会 出会いの場、分科会、宿泊		名古屋労働者研修センター	
22日(日)	9:00～	〃 総括		0561-48-2611	
	13:00～	〃 講演と討論「主婦とは」講師 松井やより		名古屋婦人会館	052-331-5288
	14:00～18:00	離婚分科会話し合い〈国際婦人年をきっかけとして行動する女たちの会〉		事務局	
	18:00～21:00	〃『離婚はこわくない』出版記念会		未定	
23日(月)	18:30～	鉄連の7人とともに性による仕事差別・賃金差別と闘う会 運営委員会(毎第2・第4木曜日)		事務局	
26日(木)		離婚分科会〈行動する女たちの会〉		事務所	
28日(土)	14:00～16:00	婦人民主クラブ歴史講座「近代100年を通して」講師 もろさわようこ		恵比寿区民会館	
	18:30～	あごら北海道・例会		ひらひら	
8月3日(日)	18:30～	「あごら20号の水田論文、漆田論文について」〈あごら北東京・例会〉		婦人共同法律事務所	03-985-3308

各地のあごら連絡先

- ・あごら旭川
 ・旭川市神楽岡一条五丁目3 田代慶子
 ・0166 65 6237 7078-11
 ・あごら札幌
 ・岩見沢市九条西三丁目 山口里子
 ・01262 4 6772 7068
 ・あごら北東京
 ・川口市芝北町3413 宗久知恵子
 ・0482 65 0241 7332
 ・あごら武蔵野
 ・小平市小川町1-763-86 丹羽雅代
 ・0423 43 6749 7187
 ・あごら京王
 ・府中市曙見町3-21 関 和子
 ・0423 62 4705 7183
 ・あごら神奈川
 ・川崎市多摩区生田4634 沼田千恵子
 ・044 933 9079 7214
 ・あごら東海
 ・名古屋市長区大高町伊賀殿107 高橋ますみ
 ・052 622 4926 7459
 ・あごら京都
 ・京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子
 ・075 791 4623 7606
 ・あごら阪神
 ・尼崎市武庫之荘3-6-6 木沢みすず
 ・06 431 5376 7661
 ・あごら九州
 ・福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子
 ・092 521 7624 7810

【編集後記】第二回全国大会は昨年の二倍を超える申し込み。運営後の「あごら東海」では対策に苦慮した結果、とにかく申し込みに全員を受け付けることにし、予定以外に二宿舎をさらに予約、三会場に分宿の計画を立てました。「あごら」の急成長に嬉しい誤算」と徹夜でフラフラしながらも準備に張り切り切ります。スタートした「BOC東海」も予想以上の出足。怪気焰をご期待ください。（八月号は夏休みとします）